

阿Q正伝

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫

第一章 序

わたしは阿^あQ^{きよ}の正伝を作ろうとしたのは一年や二年のことではなかった。けれども作ろうとしながらまた考えなおした。これを見てもわたしは立言の人でないことが分る。從來不朽の筆は不朽の人を伝えるもので、人は文に依って伝えらる。つまり誰^{たれ}某^{それ}に靠^よって伝えられるのであるから、次第にハッキリしなくなってくる。そうして阿Qを伝えることになる、思想の上に何か幽霊のようなものがあつて結末があやふやになる。

それはそうとこの一篇の朽ち易い文章を作るために、わたしは筆を下すが早い、いろいろの困難を感じた。第一は文章の名目であつた。孔子様の被^{おっしや}仰^{おんやう}するには「名前が正しくない」と話が脱線する」と。これは本来極めて注意すべきことで、伝記の名前は列伝、自伝、内伝、外伝、別伝、家伝、小伝などとずいぶん蒼蠅^{うるさ}いほどたくさんあるが、惜しいかな皆合わない。

列伝としてみたらどうだろう。この一篇はいろんな偉い人と共に正史の中に排列すべきものではない。自伝とすればどうだろう。わたしは決して阿Qその物でない。外伝とすれ

ば、内伝が無し、また内伝とすれば阿Qは決して神仙ではない。しからば別伝としたらどうだろう。阿Qは大總統の上諭に依つて国史館に宣付せんぷして本伝を立てたことがまだ一度もない。——英国の正史にも博徒列伝というものは決して無いが、文豪ヂッケンスは博徒別伝という本を出した。しかしこれは文豪のやることでわれわれのやることではない。そのほか家伝という言葉もあるが、わたしは阿Qと同じ流れを汲んでいるか、どうかしらん。彼の子孫にお辞儀されたこともない。小伝とすればあるいはいいかもしれないが、阿Qは別に大伝たいでんというものがない。煎じ詰めるとこの一篇は本伝というべきものだが、わたしの文章の著ちやく想そうからいうと文体が下卑ひていて「車を引いて漿のりを売る人達」が使う言葉を用以もちているから、そんな僭越けんえつな名目はつかえない。そこで三教九流の数に入いらない小説家のいわゆる「閑話休題、言歸正伝」という紋切型の中から「正伝」という二字を取出して名目とした。すなわち古人が撰せんした書法正伝のそれに、文字もんじの上から見るとはなはだ紛まらしいが、もうどうでもいい。

第二、伝記を書くには通例、しよつぱなに「何某、あぎなは何、どこその人也」とするのが当りまえだが、わたしは阿Qの姓せいが何とか少しも知らない。一度彼は趙ちやうと名乗な乗っていたようであつたが、それも二日目にはあいまいになつた。

それは趙太爺だんなの息子が秀才になった時の事であつた。阿Qはちやうど二碗の黄酒うわんちゆを飲み干して足踏み手振りして言つた。これで彼も非常な面目を施した、というのは彼と趙太爺はもともと一家の分れで、こまかく穿鑿せんさくすると、彼は秀才よりも目上だと語つた。この時そばに聴いていた人達は肅然としていささか敬意を払つた。ところが二日目には村役人が阿Qを喚よびに来て趙家に連れて行つた。趙太爺は彼を一目見ると顔じゆう真赤まっかにして怒鳴つた。

「阿Q！ キサマは何とぬかした。お前が乃公おれの御本家か。たわけめ」
阿Qは黙つていた。

趙太爺は見れば見るほど癩に障つて二三歩前に押し出し「出鱈目でたらめもいい加減にしろ。お前のような奴が一家にあるわけがない。お前の姓は趙というのか」

阿Qは黙つて身を後ろに引こうとした時、趙太爺は早くも飛びかかつて、ぴしやりと一つ呉れた。

「お前は、どうして趙という姓がわかつた。どこからその姓を分けた」

阿Qは彼が趙姓である確証を弁解もせず、ただ手を以て左の頬を撫でながら村役人と一緒に退出した。外へ出るとまた村役人から一通りお小言をきいて、二百文の酒手を出し

て村役人にお詫びをした。この話を聴いた者は皆言つた。阿Qは実に出鱈目な奴だ。自分で擲なぐられるようなことを仕出かしたんだ。彼は趙だか何だか知れたもんじやない。よし本当に趙であつても、趙太爺がここにいる以上は、そんなたわごとを言つてはけしからん。それからというものは彼の名みょうじ氏じを持ち出す者が無くなつて、阿Qは遂に何姓であるか、突きとめることが出来なかつた。

第三、わたしはまた、阿Qの名前をどう書いていいか知らない。彼が生きている間は、人は皆阿QQueiと呼んだ。死んだあとではもう誰一人阿QQueiの噂をする者がないので、どうして「これを竹帛ちくはくに著す」ことが出来よう。「これ竹帛に著す」ことから言えば、この一篇の文章が皮切であるから、まず、第一の難関にぶつかるのである。わたしはつくづく考えてみると、阿QQueiは、阿桂あくいあるいは阿貴あくいかもしれない。もし彼に月亭げつていという号があつてあるいは生れた月日が八月の中頃であつたなら、それこそ阿桂に違いない。しかし彼には号がない。——号があつたかもしれないが、それを知っている人は無い。——そうして生年月日を書いた手帖などどこにも残つていないのだから、阿桂ときめてしまうのはあんまり乱暴だ。

もしまた彼に一人の兄弟があつて阿富あふと名乗つていたら、それこそきつと阿貴に違いな

い。しかし彼は全くの独り者であつてみると、阿貴とすべき左証がない。その他 *Quei* と発音する文字は皆変積な意味が含まれいつそう嵌りが悪い。以前わたしは趙太爺の倅の茂才先生に訊いてみたが、あれほど物に詳しい人でも遂に返答が出来なかつた。しかし結論から言えば、陳獨秀が雑誌「新青年」を発行して羅馬字を提唱したので国粹が亡びて考えようが無くなつたんだ。そこでわたしの最後の手段はある同郷生に頼んで、阿Q事件の判決文を調べてもらうより外はなかつた。そうして一ヶ月たつてようやく返辞が来たのを見ると、判決文の中に阿*Quei*の音に近い者は決して無いという事だつた。わたし自身としては本当にそれが無いということは言えないが、もうこの上は調べようがない。そこで、注音字母では一般に解るまいと思つて、所なく洋字を用い、英国流行の方法で彼を阿*Quei*と書き、更に省略して阿Qとした。これは近頃「新青年」に盲従したこと
で我ながら遺憾に思うが、しかし茂才先生でさえ知らないものを、わたしどもに何のいい
智慧が出よう？

第四は阿Qの原籍だ。もし彼が趙姓であつたなら、現在よく用いらるる郡望の旧例に拠り、郡名百家姓に書いてある注解通りにすればいい。「隴西天水の人也」といえば済む。しかし惜しいかな、その姓がはなはだ信用が出来ないので、したがつて原籍も決

定することが出来ない。彼は未莊みそうに住んだことが多いがときどき他処たしよへ住むこともある。もしこれを「未莊の人也」といえばやはり史伝の法則そむに乖そむく。

わたしが幾分自分で慰められることは、たった一つの阿の字が非常に正確であった。こればかりはこじつけやかこつけではない。誰が見てもかなり正しいものである。その他のことになるやと学問の低いわたしには何もかも突き止めることが出来ない。ただ一つの希望は「歴史癖と考証好すき」で有名な胡適こてきし之先生の門人等らが、ひよつとすると将来幾多の新端たんし緒よを尋ね出すかもしれない。しかしその時にはもう阿Q正伝は消滅しているかもしれない。

第二章 優勝記略

阿Qは姓名も原籍も少々あいまいであった。のみならず彼の前半生の「行状」もまたあいまいであった。それというのも未莊の人達はただ阿Qをコキ使い、ただ彼をおもちやにして、もとより彼の「行状」などに興味を持つ者が無い。そして阿Q自身も身の上話などしたことはない。ときたま人と喧嘩をした時、何かのはずみに目を瞠みはって

「乃公達だつて以前は——てめえよりやよツぽど豪勢なもんだぞ。人をなんだと思つていやがるんだえ」というくらいが勢一杯だ。

阿Qは家が無い。未莊の土穀祠おひなりさまの中に住んでいて一定の職業もないが、人に頼まれると日傭取ひようとりになつて、麦をひけと言われれば麦をひき、米を搗つげと言われれば米を搗き、船を漕こげと言われれば船を漕ぐ。仕事之余る時には、臨時に主人の家に寝泊りして、済んでしまえばすぐに出て行く。だから人は忙せわしない時には阿Qを想い出すが、それも仕事のことであつて「行状」のことでは決して無い。いったん暇になれば阿Qも糸瓜へちまもないのだから、彼の行状のことなどなおさら言い出す者が無い。しかし一度こんなことがあつた。あるお爺さんが阿Qをもちやげて「お前は何をさせてもソツが無いね」と言つた。この時阿Qは臂ひじを丸出しにして（支那チョッキをじかに一枚著ている）無ぶ性臭しうい見すばらしい風体で、お爺さんの前に立つていた。はたの者はこの話を本気にせず、やっぱりひやかしだと思つていたが、阿Qは大層喜んだ。

阿Qはまた大層己惚うぬぼれが強く、未莊の人などはてんで彼の眼中にない。ひどいことには二人の「文童ぶんどう」に対しても、一笑の価値さえ認めていなかった。そもそも「文童」なる者は、将来秀才となる可能性があるもので、趙太爺や錢太爺せんだんなが居民の尊敬を受けている

のは、お金がある事の外ほかに、いずれも文童の父であるからだ。しかし阿Qの精神には格別の尊念が起らない。彼は想った。乃公だつて倅せがれがあればもつと偉くなつてゐるぞ！城内に幾度も行つた彼は自然己惚おぼれが強くなつていたが、それでいながらまた城内の人をさげすんでいた。たとえば長さ三尺幅じやく三寸の木の板で作つた腰掛は、未荘では「長登チャンテン」といい、彼もまたそう言つているが、城内の人が「条登テョーテン」というつと、これは間違いだ。おかしなことだ、と彼は思つている。鱧たらの煮浸にびたしは未荘では五分切の葱の葉を入れるのであるが、城内では葱を糸切りにして入れる。これも間違いだ、おかしなことだ、と彼は思つている。ところが未荘の人はまつたくの世間見ずで笑うべき田舎者だ。彼等は城内の煮魚さえ見たことがない。

阿Qは「以前は豪勢なもん」で見識が高く、そのうえ「何をさせてもソツがない」のだから、ほとんど一ぱいっぱしの人物と言つてもいいくらいのものだが、惜しいことに、彼は体質上少々欠点があつた。とりわけ人に嫌らわれるのは、彼の頭の皮の表面にいつ出来たものかずいぶん幾個いくこしょ所も瘡かさだらけの禿はげがあつた。これは彼の持物であるが、彼のおもわくを見るとあんまりいいものでもないらしく、彼は「癩らひ」という言葉言葉を嫌つて一切「頼たひ」に近い音おんまでも嫌つた。あとではそれを推おしひろめて「亮りやう」もいけない。「光こう」もいけない。

その後また「燈」も「燭」も皆いけなくなつた。そういう言葉をちよつとでも洩もそうものなら、それが故意であろうと無かろうと、阿Qはたちまち頭じゆうの禿まっかを真赤にして怒り出し、相手を見積つて、無口の奴は言い負かし、弱そうな奴は擲なぐりつけた。しかしどういふものかしらん、結局阿Qがやられてしまうことが多く、彼はだんだん方針を変更し、大抵の場合は目を怒らして睨んだ。

ところがこの怒目主義どもくを採用してから、未莊のひま人はいよいよ附け上がつて彼を翹なげり物にした。ちよつと彼の顔を見ると彼等はわざとおツたまげて

「おや、明るくなつて来たよ」

阿Qはいつもの通り目を怒らして睨むと、彼等は一向平気で

「と思つたら、空気ランプがここにある」

アハハハハと皆は一緒になつて笑つた。阿Qは仕方なしに他の復讐まがの話をして

「てめえ達は、やつぱり相手にならねえ」

この時こそ、彼の頭の上には一種高尚なる光榮ある禿があるのだ。ふだんの斑まだら禿とは違ふ。だが前にも言つたとおり阿Qは見識がある。彼はすぐに規則違犯を感じて、もうその先きは言わない。

閑人^{ひましん}達はまだやめないで彼をあしらっていると、遂に打ち合いになる。阿Qは形式上負かされて黄いろい辮子^{べんつ}を引張られ、壁に対して四つ五つ鉢合せを頂^{ちようだい}戴^{だい}し、閑人はようやく胸をすかして勝ち慢^{ほこ}つて立去る。

阿Qはしばらく佇んでいたが、心の中で思った。「乃公はつまり子供に打たれたんだ。今の世の中は全く成っていない……」そこで彼も満足し勝ち慢^{ほこ}つて立去る。

阿Qは最初この事を心の中で思っていたが、遂にはいつも口へ出して言った。だから阿Qとふざける者は、彼に精神上の勝利法があることをほとんど皆知ってしまった。そこで今度彼の黄いろい辮子^{べんつ}を引^ひ掴^{つか}む機会が来るとその人はまず彼に言った。

「阿Q、これでも子供が親爺^{おやじ}を打つのか。さあどうだ。人が畜生を打つんだぞ。自分で言え、人が畜生を打つと」

阿Qは自分の辮子で自分の両手を縛られながら、頭を歪めて言った。

「虫ケラを打つを言えいいだろう。わしは虫ケラだ。——まだ放さないのか」

だが虫ケラと言つても閑人は決して放さなかった。いつもの通り、ごく近くのどこかの壁に彼の頭を五つ六つぶつつけて、そこで初めてせいせいして勝ち慢^{ほこ}つて立去る。彼はそう思った。今度こそ阿Qは凹^{へこ}垂^たれたと。

ところが十秒もたたないうちに阿Qも満足して勝ち慢ほこつて立去る。阿Qは悟ほこつた。乃公は自ら軽みずかんじ自ら賤いやしむことの出来る第一の人間だ。そういうことが解らない者は別として、その外の者に対しては「第一」だ。状じょうげん元げんもまた第一人じやないか。「人を何だと思つていやがるんだえ」

阿Qはこういう種々の妙法を以て怨敵を退散せしめたあとでは、いつそ愉快になつて酒屋に馳けつけ、何杯か酒を飲むうちに、また別の人と一通り冗談を言つて一通り喧嘩をして、また勝ち慢ほこつて愉快になつて、土穀祠おいなりさまに帰り、頭を横にするが早いか、ぐうぐう睡ねむつてしまうのである。

もしお金があれば彼は博奕ぼくちを打ちに行く。一かたまりの人が地面にしやがんでいる。阿Qはその中に割込んで一番威勢のいい声を出している。

「青竜四百！」

「よし……あける……ぞ」

堂元は蓋を取つて顔じゆう汗だらけになつて唱うたい始める。

「天門てんもん当り——隅返すみがえし、人と、中張なかばり張手無はりてし——阿Qの銭ぜにはお取上げ——」

「中張なかばり百文——よし百五十文張つたぞ」

阿Qの銭はこのような吟詠のもとに、だんだん顔じゆう汗だらけの人の腰の辺に行つてしまふ。彼は遂にやむをえず、かたまりの外へ出て、後ろの方に立つて人の事で心配しているうちに、博奕はずんずん進行してお終いになる。それから彼は未練らしく土穀祠に帰り、翌日は眼のふちを腫らしながら仕事に出る。

けれど「塞翁が馬を無くしても、災難と極まったものではない」。阿Qは不幸にして一度勝つたが、かえつてそれがためにほとんど大きな失敗をした。

それは未莊の祭の晩だった。その晩例に依つて芝居があつた。例に依つてたくさんの博奕場が舞台の左側に出た。囃の声などは阿Qの耳から十里の外へ去つていた。彼はただ堂元の歌の節だけ聴いていた。彼は勝つた。また勝つた。銅貨は小銀貨となり、小銀貨は大元になり、大洋は遂に積みかさなつた。彼は素敵な勢いで「天門兩塊」と叫んだ。

誰と誰が何で喧嘩を始めたんだか、サツパリ解らなかつた。怒鳴るやら殴るやら、バタバタ馳け出す音などがしてしばらくの間眼が眩んでしまった。彼が起き上つた時には博奕場も無ければ人も無かつた。身中かなりの痛みを覚えて幾つも拳骨を食い、幾つも蹶飛ばされたようであつた。彼はぼんやりしながら歩き出して土穀祠に入った。気がついてみると、あれほどあつた彼のお金は一枚も無かつた。博奕場にいた者はたいていこの村の

者では無かった。どこへ行つて訊き出すにも訊き出しようがなかった。

まっ白なピカピカした銀貨！ しかもそれが彼の物なんだが今は無い。子供に盗とられたことにおけばいいが、それじゃどうも気が済まない。自分を虫ケラ同様に思えばいいが、それじゃどうも気が済まない。彼は今度こそいささか失敗の苦痛を感じた。けれど彼は失敗を転じて遂に勝ちほてとした。彼は右手を挙げて自分の面おもてを力任せに引ツぱたいた。すると顔がカツとして火照り出ほてしかなりの痛みを感じたが、心はかえつて落ち著ついて来た。打つたのはまさに自分に違ちがいが、打たれたのはもう一人の自分のようでもあつた。そうこうするうちに自分が人を打つてゐるような氣持になつた。——やっぱり幾らか火照るほてには違ちがいないが——心は十分満足して勝ち慢ほこつて横になつた。

彼は睡つてしまつた。

第三章 続優勝記略

それはそうと、阿Qはいつも勝つていたが、名前が売れ出したのは、趙太爺の御ちようちやくを受けてからのことだ。

彼は二百文の酒手を村役人に渡してしまふと、ぷんぷん腹を立てて寝転んだ。あとで思いついた。

「今の世界は話にならん。倅が親爺を打つ……」

そこでふと趙太爺の威風を想い出し、それが現在自分の倅だと思ふと我れながら嬉しくなった。彼が急に起き上つて「若寡婦の墓参り」という歌を唱いながら酒屋へ行つた。この時こそ彼は趙太爺よりも一段うわ手の人物に成り済ましていたのだ。

変槓なこつたがそれからというもの、果してみんなが殊の外彼を尊敬するようになった。これは阿Qとしては自分が趙太爺の父親になりすましているのだから当然のことであるが、本当の処はそうでなかつた。未荘の仕来りでは、阿七が阿八を打つような事があつても、あるいは李四が張三を打つても、そんなことは元より問題にならない。ぜひともある名の知れた人、たとえば趙太爺のような人と交渉があつてこそ、初めて彼等の口に端に掛るのだ。一遍口の端に掛れば、打つても評判になるし、打たれてもそのお蔭で評判になるのだ。阿Qの思い違いなどももちろんどうでもいいのだ。そのわけは？　つまり趙太爺に間違いのあるはずはなく、阿Qに間違いがあるのに、なぜみんなは殊の外彼を尊敬するようになったか？　これは篋棒な話だが、よく考えてみると、阿Qは趙太爺の本

家だと言つて打たれたのだから、ひよつとしてそれが本当だったら、彼を尊敬するのは至極穩当な話で、全くそれに越したことはない。でなければまた左のような意味があるかもしれない。聖廟せいびやうの中のお供物のように、阿Qは猪羊ちよやうと同様の畜生であるが、いったん聖人のお手がつくと、学者先生、なかなかそれを粗末にしない。

阿Qはそれからというものはずいぶん長いこと偉張いばつていた。

ある年の春であつた。彼はほろ酔い機嫌で町なかを歩いていると、垣根の下の日当りに王ワン※がもろ肌ぬいで虱しらみを取つているのを見た。たちまち感じて彼も身体がむず痒がゆくなつた。この王※は禿瘡はげがさでもある上に、※をじじむさく伸ばしていた。阿Qは禿瘡はげがさの一点は度外ほかに置いているが、とにかく彼を非常に馬鹿にしていた。阿Qの考かんがでは、外ほかに格別變つたところもないが、その顛あじに絡まる※は實ひげにすこぶる珍妙なもので見られたざまじやないと思つた。そこで彼は側そばへ行つて並んで坐つた。これがもしほかの人なら阿Qはもちろん滅多に坐るはずはないが、王※の前では何の遠慮が要るものか、正直のところ阿Qが坐つたのは、つまり彼を持上げ奉つたのだ。

阿Qは破れ衿あわせを脱ぎおろして一度引ツくらかえして調べてみた。洗つたばかりなんだがやはりぞんざいなものかもしれない。長いことかかつて三つ四つ捉とらまえた。彼は王※を見る

と、一つまた一つ、二つ三つと口の中に抛り込んでピチピチパチパチと噛み潰した。

阿Qは最初失望してあとでは不平を起した。王※なんて取るに足らねえ奴でも、あんなにどつさり持つていやがる。乃公を見ろ、あるかねえか解りやしねえ。こりやどうもおお大に面目のねえこつた。彼はぜひとも大きな奴を押し出そうと思つてあちこち捜した。しばらく経つてやつと一つ捉まえたのは中くらいの奴で、彼は恨めしそうに厚い唇の中に押込みヤケに噛み潰すと、パチリと音がしたが王※の響には及ばなかつた。

彼は禿瘡の一つ一つを皆赤くして著物を地上に突放し、ペツと唾を吐いた。

「この毛虫め」

「やい、瘡ツかき。てめえは誰の悪口を言うのだ」王※は眼を挙げてさげすみながら言つた。

阿Qは近頃割合に人の尊敬を受け、自分もいささか高慢稚氣になっているが、いつもやり合う人達の面を見ると、やはり心が怯れてしまう。ところが今度に限つて非常な勢だ。何だ、こんな※だらけの代物が生意氣言やがるとばかりで

「誰のこつたか、おらあ知らねえ」阿Qは立ち上つて、両手を腰の間に支えた。

「この野郎、骨が痒くなつたな」王※も立ち上がつて著物を著た。

相手が逃げ出すかと思つたら、掴み掛つて来たので、阿Qは拳骨を固めて一突き呉れた。その拳骨がまだ向うの身体に届かぬうちに、腕を抑えられ、阿Qはよろよろと腰を浮かした。じつけられた辮子は牆の方へと引張られて行つて、いつもの通りそこで鉢合せが始まるのだ。

「君子は口を動かして手を動かさず」と阿Qは首を歪めながら言った。

王※は君子でないと見え、遠慮会釈もなく彼の頭を五つほど壁にぶつけて力任せに突放すと、阿Qはふらふらと六尺余り遠ざかった。そこで※は大に満足して立去つた。

阿Qの記憶ではおおかたこれは生れて初めての屈辱といつてもいい、王※は願に絡まる※の欠点で前から阿Qに侮られていたが、阿Qを侮つたことは無かつた。むろん手出しなど出来るはずの者ではなかつたが、ところが現在遂に手出しをしたから妙だ。まさか世間の噂のように皇帝が登用試験をやめて秀才も挙人も不用になり、それで趙家の威風が滅じ、それで彼等も阿Qに対して見下すようになったのか。そんなことはありそうにも思われない。

阿Qは 抛所なくイんだ。

遠くの方から歩いて来た一人は彼の真正面に向つていた。これも阿Qの大嫌いの一人で、

すなわち錢太爺の総領息子だ。彼は以前城内の耶蘇やそ学校に通学していたが、なぜかしらんまた日本へ行つた。半年あとで彼が家うちに帰つて来た時には膝が真直ぐになり、頭の上の辮子が無くなつていた。彼の母親は大泣きに泣いて十幾幕も愁歎しゆうたんば場を見せた。彼の祖母は三度井戸に飛び込んで三度引上げられた。あとで彼の母親は到いたるところ 処で説明した。

「あの辮子は悪い人から酒に盛りつぶされて剪り取られたんです。本来あれがあればこそ大官たいかんになれるんですが、今となつては仕方ありません。長く伸びるのを待つばかりです」

さはいえ阿Qは承知せず、一途に彼を「偽毛唐けとう」「外国人の犬」と思い込み、彼を見るたびに肚はらの中で罵り悪ののしにくんだ。

阿Qが最も忌み嫌つたのは、彼の一本のまがい辮子だ。擬まがい物と来てはそれこそ人間の資格がない。彼の祖母が四度目よどの投身をしなかつたのは善良の女でないと阿Qは思った。

その「偽毛唐」が今近づいて来た。「禿はげ、驢ろ……」阿Qは今まで肚の中で罵るだけ口へ出して言つたことはなかつたが、今度は正義いきておの憤りでもあるし、復讐の觀念もあつたかた、思わず知らず出てしまった。

ところがこの禿の奴、一本のニス塗りのステッキを持っていて——それこそ阿Qに言わ

せると葬式の泣き杖だ——大跨おおまたに歩いて来た。この一刹那せつなに阿Qは打たれるような気がして、筋骨を引締め肩を聳そびやかして待つていると果して

ピシヤリ。

確かに自分の頭に違いない。

「あいつのことを言ったんです」と阿Qは、側そばに遊んでいる一人の子供を指さした。

ピシヤリ、ピシヤリ。

阿Qの記憶ではおおかたこれが今までであった第二の屈辱といってもいい。幸いピシヤリ、ピシヤリの響ひびきのあとは、彼に関する一事件が完了したように、かえって非常に気楽になった。それにまた「すぐ忘れてしまう」という先祖伝来の宝物が利き目をあらわし、ぶらぶら歩いて酒屋の門かどぐち口まで来た時にはもうすこぶる元気なものであった。

折柄おりから向うから来たのは、静修庵せいしゅうあんの若い尼であった。阿Qはふだんでも彼女を見るときつと悪態を吐くのだ。ましてや屈辱のあとだったから、いつものことを想い出すと共に敵愾心てきがいしんを喚起よびおこした。

「きようはなぜこんなに運が悪いかと思つたら、さてこそてめえを見たからだ」と彼は独りですう極めて、わざと彼女にきこえるように大唾を吐いた。

「ペツ、プツ」

若い尼は皆かしもく目眼も呉れず頭をさげてひたすら歩いた。すれちがいに阿Qは突然手を伸ばして彼女の剃り立ての頭を撫でた。

「から坊主！ 早く帰れ。和尚が待っているぞ」

「お前は何だつて手出しをするの」

尼は顔じゆう真赤にして早足で歩き出した。

酒屋の中の人は大笑いした。己れの手柄を認めた阿Qはますますいい気になってハシヤギ出した。

「和尚はやるかもしれねえが、おらあやらねえ」彼は、彼女の頬ほっぺたを摘つまんだ。

酒屋の中の人はまた大笑いした。阿Qはいっそう得意になり、見物人を満足させるために力任せに一捻りして彼女を突放した。

彼はこの一戦で王※のことも偽毛唐のことも皆忘れてしまつて、きょうの一切の不運が報いられたように見えた。不思議なことにはピシヤリ、ピシヤリのあの時よりも全身が軽く爽やかになつて、ふらふらと今にも飛び出しそうに見えた。

「阿Qの罰ばち当りめ。お前の世継よつぎぎは断たえてしまふぞ」遠くの方で尼の泣声がきこえた。

「ハハハ」阿Qは十分得意になった。

「ハハハ」酒屋の中の人も九分くぶ通り得意になって笑った。

第四章 恋愛の悲劇

こういう人があつた。勝利者というものは、相手が虎のような鷹のようなものであれかしと願ひ、それでこそ彼は初めて勝利の歡喜を感じるのだ。もし相手が羊のようなものだったら、彼はかえつて勝利の無聊ぶりようを感じる。また勝利者というものは、一切を征服したあとで死ぬものは死に、降くだるものは降つて、「臣誠惶誠恐死罪死罪」というような状態になると、彼は敵が無くなり相手が無くなり友達が無くなり、たった一人上にいる自分だけが別物になつて、凄すさましく淋しくかえつて勝利者の悲哀を感じる。ところが我が阿Qにおいてはこのような欠乏はなかつた。ひよつとするとこれは支那しなの精神文明が全球第一である一つの証拠かもしれない。

見たまえ。彼はふらりふらりと今にも飛び出しそうな様子だ。

しかしながらこの一回の勝利がいささか異様な変化を彼に与えた。彼はしばらくの間ふ

らりふらりと飛んでいたが、やがてまたふらりと土穀祠おいなりさまに入った。常例に抛るとそこですぐ横になっていびき軒をかくんだが、どうしたものかその晩に限って少しも睡れない。彼は自分の親指と人差指がいつもよりも大層脂あぶらぎ漲つて変な感じがした。若い尼の顔の上の脂が彼の指先に粘りついたのかもしれない。それともまた彼の指先が尼の面の皮つらにこすられてすべっこくなくなったのかもしれない。

「阿Qの罰当りめ。お前の世嗣よつぎは断たえてしまうぞ」

阿Qの耳みみたぶ朶の中にはこの声が確かに聞えていた。彼はそう想つた。

「ちげえねえ。一人の女があればこそだ。子が断たえ孫が断たえてしまつたら、死んだあとで一碗の御飯を供える者がない。……一人の女があればこそだ」

一体「不孝には三つの種類があつて後嗣あとつぎが無いのが一番悪い」、そのうえ「若敖むえんぼとけ之鬼餒のひぼし而」これもまた人生の一大悲哀だ。だから彼もそう考えて、実際どれもこれも聖賢おしえの教に合致していることをやつたんだが、ただ惜しいことに、後になつてから「心の駒を引き締めることが出来なかつた」

「女、女……」と彼は想つた。

「……和尚ようき（陽器）は動く。女、女！……女！」と彼は想つた。

われわれはその晚いつ時分になって、阿Qがようやく鼾をかいたかを知ることが出来ないが、とにかくそれからというもの彼の指先に女の脂がこびりついて、どうしても「女！」を思わずにはいられなかった。

たつたこれだけでも、女というものは人に害を与える代物だと知ればいい。

支那の男は本来、大抵皆聖賢となる資格があるが、惜しいかな大抵皆女のために壊されてしまう。商は妲己のために騒動がもちあがった。周は褒姒のために破壊された？ 秦：…公然歴史に出ていないが、女のために秦は破壊されたといっても大して間違いはあるまい。そうして董卓は貂蝉のために確実に殺された。

阿Qは本来正しい人だ。われわれは彼がどんな師匠に就いて教を受けたか知らないが、彼はふだん「男女の区別」を厳守し、かつまた異端を排斥する正気があった。たとえば尼、偽毛唐の類。——彼の学説では凡ての尼は和尚と私通している。女が外へ出れば必ず男を誘惑しようと思う。男と女と話をすればきつと碌なことはない。彼は彼等を懲しめる考で、おりおり目を怒らせて眺め、あるいは大声をあげて彼等の迷いを醒し、あるいは密会所に小石を投げ込むこともある。

ところが彼は三十になつて竟に若い尼になやまされて、ふらふらになった。このふらふ

らの精神は礼教上から言うて決してよくないものである。——だから女は真に悪むべきものだ。もし尼の顔が脂漲つていなくなったら阿Qは魅せられずに済んだろう。もし尼の顔に覆面が掛つていたら阿Qは魅せられずに済んだろう——彼は五六年前、舞台の下の人混みの中で一度ある女の股倉またくらに足を挟まれたが、幸いズボン隔着ていたので、ふらふらになるようなことはなかった。ところが今度の若い尼は決してそうではなかった。これを見てもいかに異端の悪むべきかを知るべし。

彼は「こいつはきつと男を連れ出すわえ」と思うような女に対していつも注意してみていたが、彼女は決して彼に向つて笑いもしなかった。彼は自分と話をする女の言葉をいつも注意して聴いていたが、彼女は決して艶ッぽい話を持ち出さなかった。おおこれが女の悪むべき点だ。彼等は皆「偽道德」を著きていた。そう思いながら阿Qは「女、女!……」と想つた。

その日阿Qは趙太爺の家で一日米を搗いた。晩飯が済んでしまうと台所で煙草を吸つた。これがもしほかの家なら晩飯が済んでしまうとすぐに帰るのだが趙家は晩飯が早い。定例じようれいに拠るとこの場合点燈を許さず、飯が済むとすぐ寝てしまうのだが、端無くもまた二三の例外があつた。

その一は趙太爺が、まだ秀才に入らぬ頃、燈あかりを点じて文章を読むことを許された。その二は阿Qが日雇いに来る時は燈を点じて米搗くことを許された。この例外の第二に依つて、阿Qが米搗きに著手ちやくしゆする前に台所で煙草を吸つていたので。

呉媽ウーマは、趙家の中でたった一人の女僕じよぼくであつた。皿小鉢を洗つてしまふと彼女もまた腰掛の上に坐して阿Qと無駄話をした。

「奥さんはきょうで二日御飯をあがらないのですよ。だから旦那は小妾ちいさいのを一人買おうと思つているんです」

「女……呉媽……このチビごけ」と阿Qは思った。

「うちの若奥さんは八月になると、赤ちゃんが生れるの」

「女……」と阿Qは思った。

阿Qは煙管きせるを置いて立上つた。

「内の若奥さんは……」と呉媽はまだ喋舌しゃべつていた。

「乃公とお前と寝よう。乃公とお前と寝よう」

阿Qはたちまち強要と出掛け、彼女に対してひざまずいた。

一刹那せつな、極めて森閑しんかんとしていた。

呉媽はしばらく神威しんいに打たれていたが、やがてガタガタ顫え出した。

「あれーッ」

彼女は大声上げて外へ馳かけ出し、馳かけ出しながら怒鳴っていたが、だんだんそれが泣声に変わって来た。

阿Qは壁むかに對むかつて跪坐きざし、これも神威に打たれていたが、この時両手をついて無性ぶしょうらしく腰を上げ、いささか沫あわを食たつたような体ていでドギマギしながら、帯の間に煙管を挿し込み、これから米搗ゆきに行ゆこうかどうかとまごまごしているところへ、ポカリと一つ、太い物が頭の上から落ちて来た。彼はハツとして身を転じると、秀才は竹の棒キレをもつて行手を塞いだ。

「キサマは謀叛むほんを起したな。これ、こん畜生………」

竹の棒はまた彼に向つて振り下された。彼は両手を挙げて頭をかかえた。當つたところはちようど指の節の真上で、それこそ本当に痛く、夢中になって台所を飛び出し、門を出る時また一つ背中の上をどやされた。

「忘八蛋ワンパダン」

後ろの方で秀才が官話かんわを用いて罵る声が聞えた。

阿Qは米搗場に駈込んで独り突立っていると、指先の痛みはまだやまず、それにまた

「忘八蛋ワンパダン」という言葉が妙に頭に残つて薄気味悪く感じた。この言葉は未荘の田舎者は

かつて使つたことがなく、専らお役所のお歴々れきれきが用ゆるもので印象が殊の外深く、彼の

「女」という思想など、急にどこへか吹つ飛んでしまった。しかし、ぶつ叩かれてしまえ

ば事件が落著して何の障りさわがないのだから、すぐに手を動かして米を搗き始め、しばらく

搗いていると身内が熱くなつて来たので、手をやすめて著物きものをぬいだ。

著物きものを脱ぎおろした時、外の方が大変騒々しくなつて来た。阿Qは自体賑やかなことが

好きで、声を聞くとすぐに声のある方へ馳かけ出して行つた。だんだん側そばへ行つてみると、

趙太爺の庭内でたそがれの中ではあるが、大勢集つてあつまいる人の顔の見分けも出来た。まず

目につくのは趙家のうちじゅうの者と二日も御飯を食べないでいる若奥さんの顔も見えた。

他に隣の鄒七嫂すうしちせうや本当の本家の趙白眼ちようはくがん、趙司晨ちようししんなどもいた。

若奥さんは下部屋しもべやからちようど呉媽を引張り出して来たところだ

「お前はよそから来た者だ……自分の部屋に引込んではいけな……」

鄒七嫂せうしちせうも側そばから口を出し

「誰だつてお前の潔白を知らない者はありません……決して気短なことをしてはいけませ

ん」といった。

呉媽はひた泣きに泣いて、何か言っていたが聞き取れなかった。

阿Qは想った。「ふん、面白い。このチビごげが、どんな悪戯いたづらをするかしらんで？」

彼は立聴きしようと思つて趙司晨そげの側までゆくと、趙太爺は大きな竹の棒を手に持つて彼をめが目蒐けて跳び出して来た。

阿Qは竹の棒を見ると、この騒動が自分が前に打たれた事と関係があるんだと感づいて、急に米搗場に逃げ帰ろうとしたが、竹の棒は意地悪く彼の行手を遮つた。そこで自然の成行きに任せて裏門から逃げ出し、ちよつとの間まに彼はもう土穀祠おいなりさまの宮の中にいた。阿Qは坐っているしと肌あわだが粟立つて来た。彼は冷たく感じたのだ。春とはいえ夜になると残りの寒さが身に沁み、裸でいられるものではない。彼は趙家に置いて来た上衣うわぎがつくづく欲しくなつたが、取りに行けば秀才の恐ろしい竹の棒がある。そうこうしているうちに村役人が入つて来た。

「阿Q、お前のお袋のようなものだぜ。趙家の者にお前がふざけたのは、つまり目上を犯したんだ。お蔭で乃公はゆうべ寝ることが出来なかつた。お前のお袋のようなものだぜ」
こんな風に通り教訓されたが、阿Qはもちろん黙っていた。拳句の果てに、夜だから

役人の酒手を倍増しにして四百文出すのが、あたりまえ当前だということになった。阿Qは今持合せがないから一つの帽子を質に入れて、五つの条件を契約した。

一、みょうにちべにろうそく明日 日 紅蠟燭 一对（目方一斤の物に限る）線香一封を趙家に持参して謝罪する事。

二、趙家では道士を喚んで首縊りの幽霊を祓う事（くびくくりゆうれい首縊 幽霊は最も獰猛なる悪鬼で、阿Qが女を口説いたのもその祟りだと仮想する）。費用は阿Qの負担とす。

三、阿Qは今後決して趙家の閼を越えぬ事。

四、呉媽に今後意外の変事があった時には、阿Qの責任とす。

五、阿Qは手間賃と裕を要求することを得ず。

阿Qはもちろん皆承諾したが、困ったことにはお金が無い。幸い春でもあるし、要らなくなつた棉入れを二千文に質入れして契約を履行した。そうして裸になつてお辞儀をしたあとは、確かに幾文か残つたが、彼はもう帽子を請け出そうとも思わず、あるだけのものは皆酒にして思い切りよく飲んでしまった。

一方趙家では、蠟燭も線香もつかわずに、大奥さんが仏参の日まで蔵しまっておいた。そうしてあの破れ上衣の大半は若奥さんが八月生んだ赤坊あかんぼうのおしめになつて、その切屑は呉媽の鞋底くつぞこに使われた。

第五章 生計問題

阿Qはお礼を済ましてもとのお廟みやに帰つて来ると、太陽は下りてしまい、だんだん世の中が変になつて来た。彼は一々想い廻した結果ついに悟るところがあつた。その原因はつまり自分の裸にあるので、彼は破れ袷がまだ一枚残っていることを想い出し、それを引掛けて横になつて眼を開けてみると太陽はまだ西の墻まがきを照しているのだ。彼は起き上りながら「お袋のようなものだ」と言つてみた。

彼はそれからまたいつものように街に出て遊んだ。裸者の身を切るようなつらさはないが、だんだん世の中が変に感じて来た。何か知らんが未莊の女はその日から彼を気味悪がつた。彼等は阿Qを見ると皆門の中へ逃げ込んだ。極端なことには五十に近い鄒七嫂まで人のあとに跟ついて潜り込み、その上十一になる女の児こを喚び入れた。阿Qは不思議でたま

らない。「こいつ等はどれもこれもお嬢さんのようなしなしていやがる。なんだ、売淫め」
 阿Qはこらえ切れなくなってお馴染の家に行つて探りを入れた。——ただし趙家の闖だ
 けは跨ぐことが出来ない——何しろ様子がすこぶる変なので、どこでもきつと男が出て来
 て、蒼蠅のような顔付を見せ、まるで乞食を追払うような体裁で

「無いよ無いよ。向うへ行つてくれ」と手を振つた。

阿Qはいよいよ不思議に感じた。

この辺の家は前から手伝が要るはずなんだが、今急に暇になるわけがない。こりやあき
 っと何か曰くがあるはずだ、と気をつけてみると、彼等は用のある時には小DONをよん
 でいた。この小Dはごくごくみすぼらしい奴で痩せ衰えていた。阿Qの眼から見ると王※
 よりも劣っている。ところがこの小わツぱめが遂に阿Qの飯碗を取ってしまったんだから、
 阿Qの怒尋常一様のものではない。彼はぶんぶんしながら歩き出した。そうしてたちまち
 手をあげて呻つた。

「鉄の鞭で手前を引ツぱたくぞ」

幾日かのあとで、彼は遂に銭府の照壁（衝立の壁）の前で小Dにめぐり逢つた。「讎
 の出会いは格別ハッキリ見える」もので、彼ははずかずか小Dの前に行くくと小Dも立止つた。

「畜生！」阿Qは眼に稜かどを立て口の端へ沫あわを吹き出した。

「俺は虫ケラだよ。いいじゃねえか……」と小Dは言った。

したでに出られて阿Qはかえって腹を立てた。彼の手には鉄の鞭が無かった。そこでただ殴るより仕様がなかった。彼は手を伸して小Dの辮子を引搦むと、小Dは片ツぽの手で自分の辮べんこん根を守り、片ツぽの手で阿Qの辮子を搦んだ。阿Qもまた空いている方の手で自分の辮根を守った。

以前の阿Qの勢いきおいを見ると小Dなど問題にもならないが、近頃彼は飢餓のため痩せ衰えているので五分々々の取組となった。四つの手は二つの頭を引搦んで双方腰を曲げ、半時間の久しきに渡って、錢府の白壁の上に一組の藍色の虹にじ形を映えいしゆつ出した。

「いいよ。いいよ」見ていた人達はおおかた仲裁する積りで言ったのであろう。

「よし、よし」見ている人達は、仲裁するのか、ほめるのか、それとも煽おだてるのかしらん。それはそうと二人は人のことなど耳にも入らなかつた。阿Qが三步進むと小Dは三步退しりぞき、遂に二人とも突立つた。小Dが三步進むと阿Qは三步退き、遂にまた二人とも突立つた。およそ半時間……未荘には時計がないからハッキリしたことは言えない。あるいは二十分かもしれない……彼等の頭はいずれも埃がかかって、額の上には汗が流れていた。そ

うして阿Qが手を放した間際に小Dも手を放した。同じ時に立上って同じ時に身を引いてどちらも人ごみの中に入った。

「覚えていろ、馬鹿野郎」阿Qは言った。

「馬鹿野郎、覚えていろ」小Dもまた振向いて言った。

この一幕ひとまくの「竜虎図」は全く勝敗がないと言つていくらいのものだが、見物人は満足したかしらん、誰たれも何とも批評するものもない。そうして阿Qは依然として仕事に頼まれなかった。

ある日非常に暖かで風がそよそよと吹いてだいぶ夏らしくなつて来たが、阿Qはかえつて寒さを感じた。しかしこれにはいろいろのわけがある。第一腹が耗へつて蒲団も帽子も上う衣わぎもないのだ。今度棉入れを売つてしまうと、褌ズボンは残っているが、こればかりは脱ぐわけには行ゆかない。破れ衾ゆが一枚あるが、これも人にやれば鞋底の資料になつても、決してお金にはならない。彼は往来でお金を拾う予定で、とうから心掛けていたが、まだめつからない。家の中を見廻したところで何一つない。彼は遂におもてへ出て食を求めた。

彼は往来を歩きながら「食を求め」なければならぬ。見馴れた酒屋を見て、見馴れた饅頭を見て、ずんずん通り越した。立ちどまりもしなければ欲しいとも思わなかった。彼

の求むるものはこの様なものではなかった。彼の求むるものは何だろう。彼自身も知らなかった。

未荘はもとより大きな村でもないから、まもなく行き尽してしまった。村端はすれは大抵水田であった。見渡す限りの新稲しんいねの若葉の中に幾つか丸形の活動の黒点が挟まれているのは、田を耕す農夫であった。阿Qはこの田家でんかの楽しみを鑑賞せずひたすら歩いた。彼は直覚的に彼の「食を求め」道はこんなまだるっこいことではいけない思ったから、彼は遂に静修庵せいしゅうあんの垣根の外へ行つた。

庵のまわりは水田であった。白壁しろかべが新緑の中に突き出していた。後ろの低い垣の中に菜畑があつた。

阿Qはしばらくためらつていたが、あたりを見ると誰も見えない。そこで低い垣を這い上つて何首鳥かしゅうの蔓つるを引張るとザラザラと泥が落ちた。阿Qは顫える足を踏みしめて桑の樹に攀よじ昇り、畑はたなか中へ飛び下りると、そこは繁りに繁つていたが、老酒ラオチュも饅頭も食べられそうなものは一つもない。西の垣根の方は竹藪で、下にたくさん筍たけのこが生えていたが生憎ナマで役に立たない。そのほか菜種があつたが実を結び、芥子菜からしなは花が咲いて、青菜は伸び過ぎていた。

阿Qは試験に落第した文童のような謂れなき屈辱を感じて、ぶらぶら園門の側^{そば}まで来ると、たちまち非常な喜びとなった。これは明かに大根畑だ。彼がしゃがんで抜き取ったのは、一つごく丸いものであったが、すぐに身をかがめて帰って来た。これは確かに尼ツちよのものだ。尼ツちよなんてものは阿Qとしては若草の屑のように思っているが、世の中の事は「一歩^{しりぞ}退いて考え」なければならぬ。だから彼はそそくさに四つの大根を引抜いて葉をむしり捨て著物の下まえの中に蔵^{しま}い込んだが、その時もう婆^{ばば}の尼は見つけていた。

「おみどふ（阿弥陀仏）、お前はなんだってここへ入って来たの、大根を盗んだね……まあ呆れた。罪作りの男だね。おみどふ……」

「俺はいつお前の大根を盗んだえ」阿Qは歩きながら言った。

「それ、それ、それで盗まないというのかえ」と尼は阿Qの懐ろをさした。

「これはお前の物かえ。大根に返辞をさせることが出来るかえ。お前……」

阿Qは言いも完^{おわ}らぬうちに足をもちやげて馳^かけ出した。追っ馳けて来たのは、一つのすこぶる肥大の黒^{くろ}狗^{いぬ}で、これはいつも表門の番をしているのだが、なぜかしらんきようは裏門に来ていた。黒狗はわんわん追いついて来て、あわや阿Qの腿^{もも}に噛みつきそうになったが、幸い著物の中から一つの大根がころげ落ちたので、狗は驚いて飛びしきった。阿Q

は早くも桑の樹にかじりつき土塀を跨いだ。人も大根も皆垣の外へころげ出した。狗は取残されて桑の樹に向つて吠えた。尼は念仏を申した。

尼が狗をけしかけやせぬかと思つたから、阿Qは大根を拾う序に小石を掻き集めたが、狗は追いかけても来なかつた。そこで彼は石を投げ捨て、歩きながら大根を噛つて、この村もいよいよ駄目だ、城内に行く方がいと想つた。

大根を三本食つてしまふと彼は已に城内行を決行した。

第六章 中興から末路へ

阿Qが再び未荘に現われた時はその年の中秋節が過ぎ去つたばかりの時だ。人々は皆おツたまげて、阿Qが帰つて来たと言つた。そこで前の事を回想してみると、彼はいつも城内から帰つて来ると非常な元気で人に向つて吹聴したもんだが、今度は決してそんなことはなかつた。ひよつとすると、彼はお廟の番人に話したかもしれない、未荘のしきたりでは趙太爺と錢太爺ともう一人秀才太爺が城内に行けば問題になるだけで、偽毛唐でさえも物の数にされないのだから、いわんや阿Qにおいてをやだ。だから番人の親爺も彼の

ために宣伝するはずもないのに、未荘の人達がどうして知っていたのだろう。

だが阿Qの今度の帰りは前とは大に違っていた。確かに今はなはだ驚異の値打があった。

空の色が黒くなつて来た時、彼は酔眼朦朧として、酒屋の門前に現われた。彼は櫃

台の側へ行って、腰の辺から伸した手に一杯握っていたのは銀と銅。櫃台の上にざらりと

置き、「現金だぞ、酒を持って来い」と言った。見ると新しい袷を着て、腰の辺には大

搭連がどつしりと重みを見せ、帯紐が下へさがつて弓状の弧線をなしている。

未荘の仕来りとして誰でもちよつと目覚ましい人物を見出した時、侮るよりもまず敬うのである。現在これが明かに阿Qであると知りながら破れ袷の阿Qとは別々である。古人の言葉に「たとい三日の間でも別れた人に逢つた時には目を見張つてその特徴を見出さなければならん」といつている。そういうわけで、ボーイも番頭も見ず知らずのそこらの人も、一種の疑いを持ちながら自然と敬いの態度を現わした。

番頭はまず合点して話しかけた。

「ほう阿Q、お前さん、帰つておいでだね」

「帰つて来たよ」

「景気がいいねえ。お前さんは——にいたの……」

「城内に行つていた……」この一つの二ウスは二日目に未莊じゆうに伝わつた。人々はみな、現金と新しい袴を持つてゐる阿Qの中興史を聴きたく思った。そういうわけで、酒屋の中でも茶館の中でも廟おみやの軒下でも、皆だんだんに探りを入れて聴き出した。その結果阿Qは新奇の畏敬を得た。

阿Qの話では、彼は拳人きよじん太爺だんなの家のお手伝うちをしていた。この一節を聴いた者は皆かしくまつた。この老爺は姓を白はくといひ城内切つての拳人であるから改めて姓をいふ必要がない。拳人という話が出ればつまり彼である。これは未莊だけでそう言つてゐるのではない、この辺百里の区域の内は皆そうであつた。人々はほとんど大抵彼の姓名を拳人老爺きよじんだんなだと思つてゐた。そのお方のお屋敷でお手伝してゐたのはもちろん敬うべきことである。けれど阿Qの言うところによ、彼はもう行つてやる気はない。この拳人老爺は実に非常な「馬鹿者」だ。この話を聴いた者はみな歎息して嬉しがつた。阿Qは拳人老爺の家で働くような人ではないが、働かないのも惜しいこつた。

阿Qの話でみると、彼が歸つて来たのは城内の人が氣に入らぬからであるらしい。これはつまり、長チャンテン（長床ながしようぎ几）を条デウテン ということや、葱の糸切を魚の中に入れて、そのうえ近頃見つけ出した欠点は、女の歩き方がいやにねじれてはなはだよくない。しか

しまった大に敬服すべき方面もある。早い話が未荘の田舎者は三十二枚の竹牌ちくはい（牌の目の二面を以て成立った牌）を打つだけのこと、麻マーチャン将を知っている者は偽毛唐だけであるが、城内では小さな餓鬼がきまでが皆よく知っている。なんだって偽毛唐が、城内の十歳そこそこの子供の手の中に入ってしまうのか。これこそ「小鬼が閻魔様と同資格で会見する」様なもので、聴けば赤面の到りだ。「てめえ達は、首くびきり斬を見たことがあるめえ」と阿Qは言った。「ふん、見てくれ、革命党を殺すなんておもしろえもんだぜ」

彼は首をふると、ちようどまん中にいた趙司晨の顔の上に唾つばきがはねかかった。この一言に皆の者はぞつとした。だが阿Qは一向平気であたりを見廻し、たちまち右手をあげて、折柄おりからくび頸を延して聴き惚れている王※のぼんのくぼを目蒐めがけて、打ちおろした。

「びしやり！」

王※は驚いて跳び上り稲妻のような速力で頸を縮めた。見ていた人達は気味悪くもあり、おかしくもあつた。それからというものは王※の馬鹿野郎、ずいぶん長い間、阿Qの側そばへは近寄らなかつた。ほかの人達もまた同じようであつた。

阿Qはこの時、未荘の人の眼の中の見当では、趙太爺以上には見えないが、たいいていおつかつの偉さくらいに思われていたといつても、さしたる語弊はなからう。

そうこうする中にこの阿Qの評判は、たちまち未荘の女部屋の奥に伝わった。未荘では錢趙両家だけが大家で、その他はたいいてい奥行が浅かった。けれども女部屋はつまり女部屋であるから一つの不思議と言つてもいい。女どもは寄るとさわるときつとその話をした。鄒七嫂が阿Qの処から買った一枚のお納戸絹の袴は古いには違いないが、たった九十仙だった。趙白眼の母親も——一説には趙司晨の母親だということだが、それはどうかしらん——彼女もまた一枚の子供用の真赤な瓦斯織の単衣物を買つたが、まだちよつと手を通したばかりの物がたつた三百大錢の九二串であつた。

そこで彼等は眼を皿のようにして阿Qを見た。絹袴が無い時には、絹袴の出物は無いかと彼に訊ねてみたと思つた。瓦斯織の単衣がほしい時には、瓦斯織の単衣の出物は無いかと彼に訊ねてみたと思つた。今度は阿Qを見ても逃げ込まないで、かえつて阿Qのあとを追馳けて、袖を引止めた。

「阿Q、お前はもつと外に絹袴を持つてゐるだろう。え、無いって。わたしは単衣物もほしいんだよ。あるだろう」

あとではこの様なことが、端近い女部屋から終に奥深い女部屋に伝わった。鄒七嫂は嬉しさの余り彼の絹袴を趙太太の処へ持つて行つてお目利きをねがった。趙太太はまた

これを趙太爺に告げて一時すこぶる真面目になって話をしたので、趙太爺は晚餐の卓上秀才太爺（息子）と討論した。阿Qは全くどうも少し怪しい。われわれの戸締もこれから注意しなければならんが、しかし彼の品物で、まだ買ってやっていいようなものがあるかもしれないと思つた。殊に趙太は直段ねだんが安くて品物がいい皮の袖無しが欲しいと思つてた時だから、遂に家族は決議して鄒七嫂にたのんで阿Qをすぐに喚んで来いと言つた。かつこれがために第三の例外をひらいてこの晩特にしばらくあかり燈をつけることを許された。

油は残り少くなつたが阿Qはまだ到着しなかつた。趙家の内の者は皆待ち焦れて、欠伸をして阿Qの氣紛きまぐれを恨み、鄒七嫂のぐうたらを怨んだ。趙太は春の一件があるので来ないかもしれないと心配したが、趙太爺は、そんなことはない、乃公がよばきつと来ると思つた。果して趙太爺の見識は高かつた。阿Qは結局鄒七嫂のあとへ跟いて来た。

「この人はただ無い無いとばかり言つているんですが、そんならじかに話してくれとわたしは言つたんです。彼は何とかいうにちがひありません。わたしも言います——」鄒七嫂は息をはずませていた。

「太爺！」阿Qは薄笑いしながら簷のきした下に立つていた。

「阿Q、お前、だいぶんお金を儲けて来たという話だが」と趙太爺はそろそろ近寄つて阿

Qの全身を目分量した。

「何しろ結構なこった。そこで……噂によるとお前は古著ふるぎをたくさん持っているそうだが、ここへ持つて来て見せるがいい……外ほかでもない、乃公も欲しいと思っっているんだ……」

「鄒七嫂にも話した通りですが、皆売切れました」

「売切れた！」趙太爺の声は調子が脱はずれた。「どうしてそんなに早く売切れたのだ！」

「あれは友達のもので、品数もあんまり多くは無いのですが、少しばかり分けてやったんです」

「そんなことを言っても、まだいくらあるに違いない」

「たった一枚幕が残っております」

「幕でもいいから持つて来てお見せ」と趙太太は慌てて言った。

「そんな物はあしたでもいいや」趙太爺はさほど熱心でもなかった。「阿Q、これからなんでも品物がある時には、まず、乃公の処へ持つて来て見せるんだぞ」

「値段は決してほかの家うちよりすくなく出すことはない」秀才は言った。

秀才の奥さんはチラリと阿Qの顔を見て彼が感動したかどうかを窺うかがった。

「わたしは皮の袖無しが一枚欲しいのだが」と趙太太は言った。

阿Qは応諾しながらも不承々々に出て行ったから、気にとめているかどうかしらん。これは趙太爺を非常に失望させ、腹が立つて気掛りで欠伸がとまってしまいうくらいであった。秀才太爺も阿Qの態度に非常な不平を抱き、この「忘八蛋」ワンバダン警戒する必要がある。いつそ村役人に吩咐いいつけてこの村に置かないことにしてやろうと言ったが、趙太爺は、そりゃ好くないことだと思つた。そうすれば怨みを受けることになる。ましてああいうことをする奴は大概「老いたる鷹は、巢の下の物を食わない」のだから、この村ではさほど心配するには及ぶまい。ただ自分の家うちだけ夜の戸締を少々嚴重にしておけばいい。

秀才もこの「庭訓」には非常に感心してすぐに阿Q追放の提議を撤回てつかいし、また鄒七嫂にも言い含めて、決してこのようなことを人に洩らしてくるな、と言つた。

けれど鄒七嫂は次の日あの藍袴を黒色に染め替えて阿Qの疑うべき節を言い布ふらして歩いた。確かに彼女は秀才の阿Q駆逐の一節を持ち出さなかったが、これだけでも阿Qに取つては非常に不利益であつた。最先まっさきに村役人が尋ねて来て、彼の幕を奪つた。阿Qは趙太太に見せる約束をしたと言つたが、村役人はそれを返しもせずになお毎まい月げつほどの附つけ届けをしろと言つた。それから村の人も彼に対してたちまち顔付を改めた。疎略なことはするわけもないがかえつてはなはだ遠ざかる気分があつた。この気分は前に彼が酒屋

の中で「ぴしやり」と言った時の警戒とは別種のものであった。「敬して遠ざかる」ような分子がずいぶん多^{おお}まじっていた。

閑人の中には阿Qの奥底を根掘り葉掘り探究する者があった。阿Qは包まず隠さず自慢らしく彼の経験談をはなした。

阿Qは小さな馬の脚に過ぎなかった。彼は垣の上にあがることも出来なければ、洞の中あなに潜ることも出来なかった。ただ外に立つて品物を受取った。ある晩彼は一つの包つつみを受取つて相棒がもう一度入ると、まもなく中で大騒ぎが始まった。彼はおぞけをふるつて逃げ出し、夜どおし歩いて終に城壁を乗り越え未荘に帰つて来た。彼はこんなことは二度とするものでないと誓った。この弁明は阿Qに取つてはいっそう不利益であった。村の人の阿Qに対して「敬して遠ざかる」ものは仕返しがいからだ、ところが彼はこれから二度と泥棒をしない泥棒に過ぎないのだ。してみると「これもまた畏るるに足らない」ものだった。

第七章 革命

宣統三年九月十四日——すなわち阿Qが搭連を趙白眼に売ってやったその日——真夜中過ぎに一つの大きな黒^{くろ}苦^{くとま}の船が趙屋敷の河添いの埠頭に著いた。この船は黒^{くろ}暗^{やみ}の中に揺られて来た。村人はぐつすり寝込んでいたので、皆知らなかつた。出て行く^ゆ時は明け方近かつたがそれがかえつて人目を引いた。こつそり調べ出した結果に拠ると、船は結局拳人老爺の船であると知れた。

この船はとりもなおさず大不安を未荘に運んでくれて、昼にもならぬうちに全村の人心は非常に動揺した。船の使命はもとより趙家の極秘であつたが、茶館や酒屋の中では、革命党が入城するので、拳人老爺がわれわれの田舎に避難して来たと、皆言つた。ただ鄒七嫂だけはそうとは言わず、あれは詰らぬガラクタ道具や檻^{ぼろ}褌^{ぼろ}著物を入れた箱で拳人老爺が保管を頼んで来たが、趙太爺が突返してしまつたんですと言つた。実際拳人老爺と趙秀才はもとからあんまり仲のいい方ではないので「しん身の泣き寄り」などするはずがない。まして鄒七嫂は趙家の隣にいたので見^{けん}聞^{もん}が割合に確実だ。だから大概彼女の言うことには間違いない。

そういうものの、謠^{ようげん}言^{げん}はなかなか盛んだ。拳人老爺は自身来たわけではないが長い手紙を寄越して趙家と「仲直り」をしたらしい。趙太爺は腹の中が一変して、どうしても彼

に悪い処がないと感じたので箱を預り、現に趙太太の床の下を塞いでいる。革命党のことについては、彼等はその晩城に入つて、どれもこれも白鉢巻、白兜で、崇正皇帝の白装束を著っていたという。

阿Qの耳朵の中にも、とうから革命党という話を聞き及んで、今年また眼ぢかに殺された革命党を見た。彼はどこから来たかしらん、一種の意見を持つていた。革命党は謀反人だ、謀反人は俺はいやだ、悪むべき者だ、断絶すべき者だ、と一途にこう思つていた。ところが百里の間に名の響いた拳人老爺がこの様に懼れたときいては、彼もまたいささか感心させられずにはいられない。まして村鳥のような未荘の男女が慌て惑う有様は、彼をしていつそう痛快ならしめた。

「革命も好かろう」と阿Qは想つた。

「ここらにいる馬鹿野郎どもの運命を革めてやれ。恨むべき奴等だ。憎むべき奴等だ……そうだ、乃公も革命党に入つてやろう」

阿Qは近來生活の費用に窘しみ内々かなりの不平があつた。おまけに昼間飲んだ空き腹の二杯の酒が、廻れば廻るほど愉快になつた。そう思いながら歩いてみると、身体がふらりふらりと宙に浮いて来た。どうした機か、ふと革命党が自分であるように思われた。未

莊の人は皆彼の俘虜とりことなった。彼は得意のあまり叫ばずにはいられなかった。

「謀反だぞ、謀反だぞ」

未莊の人は皆恐懼きょうくの眼付で彼を見た。こういう風な可憐な眼付は、阿Qは今まで見たことがなかった。ちよつと見たばかりで彼は六月氷を飲んだようにせいせいした。彼はいつそう元氣づいて歩きながら怒鳴った。

「よし、……乃公がやろうと思えばやるだけの事だ。乃公が気に入った奴は気に入った奴だ。

タツタ、ヂャンヂャン。

後悔するには及ばねえ。酔うて錯り斬る鄭賢弟あやま。

後悔するには及ばねえ。ヤーヤー……

タツタ、ヂャンヂャン、ドン、ヂャラン、ヂャン。

乃公は鉄の鞭でてめえ達を叩きのめすぞ……」

趙家の二人の旦那と本家の二人の男は、表門の入口に立って革命のことで大論判だいろっばんしていた。阿Qはそれに目も呉れず頭をもちやげてまつすぐに過ぎ去った。

「ドンドン……」

「Qさま」と趙太爺はおずおずしながら小声で彼を喚びとめた。

「チャンチャン」阿Qは彼の名前の下に、「さま」という字が繋がって来ようとは、まさか思いも依らなかつた。これは外の話で自分と関係がないと思つたから、ただ「ドンチャン、ドンチャン、チャラン、チャンチャン」と言つていた。

「Qさん」

「思切つてやつつけろ……」

「阿Q！」秀才は仕方なしにもとの通りにその名を喚んだ。

阿Qはようやく立ちどまつて首をかしげて訊いた。「なんだね」

「Qさま……当節は……」と趙太爺は口を切つたが、言い出す言葉もなかつた。「当節は……素晴らしいもんだね」

「素晴らしいと？ あたりまえよ。何をしようが乃公の勝手だ」

「……Q、わしのような貧乏仲間は大丈夫だろうな」と趙白眼はこわごわ訊いた。革命党の口振りを探るつもりであつたらしい。

「貧乏仲間？ てめえは乃公より金があるぞ」阿Qはそう言いながらすぐに立去つた。

みんな萎れ返つて物も言わない。趙家の親子は家うちに入つて灯ひともしごろまで相談した。

趙白眼も家いえに帰るとすぐに腰のまわりの搭連をほどこいて女房に渡し、箱の中に蔵おきめた。

阿Qは一通りぶらぶら飛び廻まわつて土穀祠おいなりさまに帰つて来ると、もう酔よい醒めてしまった。

その晩、廟祝みやばんの親父も意外の親しみを見せて阿Qにお茶を薦めた。阿Qは彼に二枚の煎餅をねだり、食べてしまうと四十匁め蠟燭の剩り物あまを求めて燭台を借りて火を移し、自分の小部屋へ持つて行つてひとり寝た。彼は言い知れぬ新しみと元気があった。蠟燭の火は元宵げんしやう（正月）の晩のようにパチパチと撥ねは迸とぼしたが、彼の思想も火のように撥ね迸はつた。

「謀反？ 面白いな……来たぞ来たぞ。一陣の白鉢巻、白兜、革命党は皆ダンビラをひつさげて鋼鉄の鞭、爆弾、大砲、菱形に尖った両刃の劔けん、鎖鎌おいなりさま。土穀祠おいなりさまの前を通り過ぎて『阿Q、一緒に来い』と叫んだ。そこで乃公は一緒に行く、この時未莊の村むら鳥、一群の男女こそは、いかにも気の毒千万だぜ。『阿Q、命だけはどうぞお赦ゆるし下さいまし』誰が赦してやるもんか。まず第一に死ぬべき奴は小Dと趙太爺だ。その外秀才もある。偽毛唐もある。……残る奴ばらは何本ある？ 王ワンなんて奴は残してやるべき筋合の者だが、まあどうでもいいや……」

「品物は………すぐに入り込んで箱を開けるんだ。元宝げんぼう、銀貨、モスリンの著物………秀才

婦人の寝台をまずこの廟おみやの中へ移して、そのほか錢家の卓と椅子。あるいは趙家の物でもいい。自分は懐ろ手して小Dなどは顎でつかい、おい、早くやれ。愚図々々するとぶんなぐるぞ」

「趙司晨の妹はまずい。鄒七嫂の小娘は二三年たつてから話をしよう。偽毛唐の女房は辯子の無い男と寝てやがる、はッ、こいつはたちが好くねえぞ。秀才の女房は眼蓋まぶたの上に疵きずがある——しばらく逢わないが呉媽はどこへ行つたかしらんで……惜しいことにあいつ少し脚が太過ぎる」

阿Qは彼の胸算用がすっかり片づかぬうちにもう鼾をかいた。四十匆蠟燭は燃え残つて五分ほどになり、赤々と燃え上る火光かこうは、彼の開け放しの口を照した。

「すまねえ、すまねえ」阿Qはたちまち大声上げて起き上つた。頭を挙げてきよるきよるあたりを見廻して四十匆蠟燭に目をつけると、すぐにまた頭をおろして睡ねむつてしまった。

次の日彼は遅く起きて往來に出てみたが、何もかも元の通りであつた。彼はやつぱり肚が耗へつていた。彼は何か想つていながら想い出すことが出来なかつた。たちまち何かきまりがついたような風で、のそりのそりと大跨に歩き出した。そうして有耶無耶のうちに静せ修庵いしゅうあんについた。

庵は春の時と同じような静けさであった。白壁と黒門、彼はちよつと思案して前へ行つて門を叩いた。一疋いっぴぎの狗が中で吠えた。彼は急いで瓦のカケラを拾い上げ、もう一度前へ行つて、今度は力任せにぶつ叩いて黒門の上に幾つも痘瘡あぶたが出来た時、ようやく人の出て来る足音がした。

阿Qは慌てて瓦を持ちなおし馬のように足をふんばつて、黒狗と開戦の準備をした。だが庵門はただ一すじの透間すきまをあけたのみで、黒狗が飛び出すことはないと見たので、近寄つて行くと、そこに一人の老いたる尼がいた。

「お前はまた来たのか。何の用だえ」と尼は呆れ返つていた。

「革命だぞ。てめえ知っているか」と阿Qは口籠くちごもつた。

「革命、革命とお言いだが、革命は一遍済んだよ。……お前達は何だつてそんな騒ぎをするんだえ」尼は眼のふちを赤くしながら言った。

「何だと？」阿Qは訝いぶかつた。

「お前はまだ知らないのだね。あの人達はもう革命を済ましたよ」

「誰だ？」阿Qは更に訝つた。

「秀才と偽毛唐さ」

阿Qは意外のことにぶつつかかってわけもなく面喰った。尼は彼の出鼻をへし折つて隙さず門を閉めた。阿Qはすぐに押し返したが固く締っていた。もう一度叩いてみたが返辞もしない。

これもやつぱりその日の午前中の出来事だった。機を見るに敏なる趙秀才は革命党が城内に入ったと聞いて、すぐに辮子を頭の上に巻き込み、今までずっと仲悪なかわるで通したあの錢毛唐せんけとうの処へ御機嫌伺いに行つた。これは「みなともに維これ新たなり」の時であるから、彼等は話が弾んで立ちどころに情意投合の同志となり、互に相約して革命に投じた。

彼等はいろいろ想い廻して、やつと想い出したのは靜修庵の中の「皇帝万歳万、万歳！」の一つの竜牌りゆうはいだ。これこそすぐにも革かく擲てきすべきものだと思つたから、二人は時を移さず靜修庵ゆに行くと、老いたる尼が邪魔をしたので、彼等は尼を満州政府と見做し、頭の上に少からざる棍棒と鉄拳を加えた。尼は彼等が帰つたあとで気を静めてよく見ると、竜牌はすでに已すでに砕けて地上に横たわっているのはもつともだが、觀音様の前にあつた一つの宣徳せんとく焗くが見当らないのが不思議だ。

阿Qはあとでこの事を聞いてすこぶる自分の朝寝坊を悔んだ。それにしても彼等が阿Qを誘わなかつたのは奇ツ怪千万である。阿Qは一步退しりぞいて考えた。

「彼等が、今まで知らずにいるはずはない。阿Qは己に革命党に投じているのじゃないか」

第八章 革命を許さず

未莊の人心は日々に安静になり、噂に抛れば革命党は城内に入ったが、何も格別変わったことがない。知県様ちけんはやつぱり元の位置にいて何か名目が変わっただけだ。拳人老爺は何になつたか——これ等の名目は未莊の人には皆わからなかつた。——お上が兵隊を連れて来ることは、これも前からいつもあることで、格別不思議なことでもないが、ただ一つ恐ろしいのは、ほかに幾らか不良分子が交まじつていて内部の擾じょうらん乱を計っていることだ。そうして二言目には手を動かして辮き子を剪つた。聴けば隣村の通い船を出す七斤は途中で引摺ひきずりまつて、人間らしくないような体裁にされてしまったが、それさえ大した恐怖の数に入らない。未莊の人は本来城内に行くゆことは少いの、たまたま行くゆ用事があつても差控えてしまうから、この危険にぶつかる者も少い。阿Qも城内に行つて友達に逢いたいと思つていたが、この話を聞くとやめなければならぬ。

だが未莊の人も改革なしでは済まされなかつた。幾日の後、辮き子を頭に巻込む者が逐ちくぜ

漸増加した。手ツ取り早く言うると一番最初が茂才公だ。その次が趙司晨と趙白眼だ。後では阿Qだ。これがもし夏ならば、辮子を頭の上に巻込み、あるいは一つのかたまりにするのはもとより何も珍らしい事ではないが、今は秋の暮で、この特別の歳時記が行われたのは、辮子を巻込んだ連中に取つては非常な英断と言わなければならない。未荘としてはこれもまた改革の一つでないということとは出来ない。

趙司晨は頭の後ろを空坊主にして歩いた。これを見た人は大きな声を出して言った。「ほう、革命党が来たぞ」

阿Qは非常に羨しく思った。彼はとうから秀才が辮子をわがねたというニウスを聞いていたが、自分がその様な事をしていいかという事について少しも思い及ばなかった。現在趙司晨がこうなつてみると、急に真似てみたくなつて実行の決心をきめた。彼は一本の竹箸に辮子を頭の上にわがね、しばらくためらっていたが、思切つて外へ出た。

彼が往来に出ると、人は皆彼を見るには見るが何にも言わない。阿Qは初め不快に感じてあとになるとだんだん不平が高じて来た。彼は近頃怒りツぽくなつた。實際彼の生活は謀叛前よりはよほど増した。人は彼を見ると遠慮して、どこの店でも現金は要らないという、だが阿Qは結局少からざる失望を感じた。もう革命を済ましたのに、こんなわけはな

いはずだ。そうして一度小Dを見るといよいよ彼の肚の皮が爆発した。

小Dもまた頭の上に辮子をわがねた。しかもかつあきらかに一本の竹箸を挿していた。

阿Qはこんなことを彼が仕出かそうとは全く思いも依らぬことだった。自分としてもまた彼がこのような事するのは決して許されない。小Dは何者だろう？ 阿Qはすぐにも小D

に引搦んで、彼の竹箸を捻じ折り、彼の辮子をほかして、うんと横面を引ツぱたいて、彼が生年月日時の八字を忘れ、凶々しくも革命党に入つて来た罪を懲らしめてやりたくなくなつて溜らなくなつたが、結局それも大目に見て、ベツと唾を吐き出し、ただ睨みつけていた。

この幾日の間、城内に入つたのは偽毛唐一人だけであつた。趙秀才は箱を預つたことから、自身拳人老爺を訪問したくは思つていたが、辮子を剪られる危険があるので中止した。彼は一封の「黄傘格」の手紙（柿渋引の方罫紙？）を書いて、偽毛唐に託して城内に届けてもらい、自分を自由党に紹介してくれと頼んだ。偽毛唐が帰つて来た時には、秀才は四元の銀を払つて胸の上に銀のメダルを掛けた。未荘の人は皆驚嘆した。これこそ柿油党（自由と同音、柿渋は防水のため雨傘に引く、前の黄傘格に対す）の徽章で輪林を抑えつけたんだと思つていた。趙太爺は俄に肩身が広くなり倅が秀才に中つた時にも増して目障りの者が無い。阿Qを見ても知らん顔をしている。

阿Qは不平の真最中に時々零落を感じた。銀メダルの話を聴くと彼はすぐに零落の真因を悟った。革命党になるのには、投降すればいいと思っていたが、それが出来ない。辮子を環わがねればいいと思つたがそれも駄目だ。第一、革命党に知合がなければいけないのだが、彼の知つている革命党はたつた二つしか無かつた。その一つは城内でバサリとやられてしまった。今はただ偽毛唐一人を知つているだけで、その毛唐の処へ、相談に行くゆより外は無かつた。

錢家の大門は開け扨げてあつた。阿Qは、おつかなびつくり入つて行つた。彼は中へ入りかけて非常に驚いたのは、偽毛唐がちようど広場のまん中に突立つて、真黒な洋服を着て、銀メダルを附けて、手にはかつて阿Qを懲らしめたステッキを持って、一尺余りの辮子を披ひらいて方の上に振り下げ、まるで蓬々ほうほう髪がみの劉海りゅうかい仙人せんじんのような恰好で立つていたのだ。向き合つて立つていたのは、趙白眼の外三人の閑人で、ちようど今恭々しくお話を伺つていとところだ。

阿Qはこつそり近寄つて趙白眼の後ろに立ち、心の中ではお引立に預かろうと思つているんだが、さて何と言つたらいいものか、言い出す言葉を知らなかつた。

彼を偽毛唐というのはもとより好くないことだ。西洋人も穏かでない。革命党も穏かで

ない。洋先生やんしーせんといえはあはいいかもしれない。

洋先生は眼を白黒して、ちようど講義の真最中であつたから、阿Qに眼も呉れない。

「乃公はせつかちだから顔を見るとすぐに言つた。洪君こう！ われわれは著手ちやくしゆしよう。

しかし彼は結局No.《ノー》と言つた。これは洋語だからお前達には分らない。そうでなければもつと早く成功したんだぞ。とにかく、これは彼が大事を取つて仕事をした方面なんだ。彼等は再三再四湖北に行つてくれと乃公に頼んだが、乃公はそれでも承知しないくらいだ。誰がこんな小つぽけな京城の中で事を起そうと願う奴があるもんか……」

「えーと、こーつ」阿Qは彼の話が途切れたひまに精一杯の勇気を振起ふりおこして口をひらいた。だが、どうしたわけか洋先生と、彼を喚ぶことが出来なかつた。

話を聴いていた四人の者は喫驚びつくりして阿Qの方を見た。洋先生もようやく彼に目をとめた。

「何だ」

「わたし……」

「出て行けゆ」

「わたしも……に入りたい」

「生意氣いな。ころがり出る」と洋先生は人泣かせ棒を振上げた。

趙白眼と閑人は口を揃えて怒鳴った。

「先生がころがり出ると被^{おっしや}仰^{おほ}るのに、てめえは肯^きかねえのか」

阿Qは頭の上に手を翳^{かざ}して、覚え^{おぼ}えず知らず門外に逃げ出した。洋先生は追い馳^はけても来なかつた。阿Qは六十歩余りも馳^はけ出してようやく歩^あみを弛^{ゆる}め心の中で憂愁を感じた。洋先生が彼に革命を許さないとすると、外に仕様が^ない。これから決^けして白鉢巻、白兜の人が彼を迎えに来るとい^{のぞ}望^みを起^{おこ}すことが出来ない。彼が持^もつていた抱負、志向、希望、前途^のがただ一筆で棒引されてしまった。閑人のお布^ふれが行^ゆ届^{とど}いて、小D、王※などに話の種を呉れたのは、やつぱり今度の事であつた。

彼はこのような所在なさを感じたことは今まで無いように覺えた。彼は自分の辮^{わが}子を環^わねたことについて無意味に感じたらしく、侮蔑^わをしたくなくて復讐^{かん}の考^{がえ}から、立ちどころに辮^わ子を解^ときおろそうとしたが、それもまた遂にそのままにしておいた。彼は夜になつて遊^あびに出掛^いけ、二杯の酒を借りて肚の中に飲^のみおろすと、だんだん元氣がついて来て、思想の中に白鉢巻、白兜のカケラが出現した。

ある日のことであつた。彼は常例に依り夜更けまでうろつき廻^まつて、酒屋が戸締^とをする

頃になつてようやく土穀祠おいなりさまに歸つて来た。

「パン、パン」

彼はたちまち一種異様な音声をきいたが爆竹では無かつた。一たい彼は賑やかな事が好きで、下らぬことに手出しをしたがる質たちだから、すぐに暗やみの中を探ゆつて行くと、前の方にいささか足音がするようであつた。彼は聴きき耳みみ立てていると、いきなり一人の男が向うから逃げて来た。彼はそれを見るとすぐに跡に跟着いて馳け出した。その人が曲ると阿Qも曲つた。曲つてしまうとその人は立ちどまつた。阿Qもまた立ちどまつた。阿Qは後ろを見ると何も無かつた。そこで前へ向つて人を見ると小Dであつた。

「何だ」阿Qは不平を起した。

「趙……趙家がやられた。掠奪……」小Dは息をはずませていた。

阿Qも胸がドキドキした。小Dはそう言つてしまふと歩き出した。阿Qはいつたん逃げ出したものの、結局「その道の仕事をやった」事のある人だから殊の外度胸が据すわつた。彼は路角みちかどに蹙いぢり出て、じつと耳を澄まして聴いていると何だかぎわがわしているようだ。そこでまたじつと見澄ましていると白鉢巻、白兜の人が大勢いて、次から次へと箱を持出し、器物を持出し、秀才夫人の寧波寢ニンポウねだ台をもち出したようでもあつたがハッキリしな

った。

彼はもう少し前へ出ようとしたが両脚が動かなかった。

その夜は月が無かった。未荘は暗黒の中に包まれてはなはだしんとしていた。しんとしていて羲皇ぎこうの頃のような太平であった。阿Qは立っているうちにじれったくなくなって来たが、向うではやはり前と同じように、往ったり来たりしているらしく、箱を持ち出したり器物を持ち出したり、秀才夫人の寧波ニンポウ寝台を持ち出したり……

持ち出したと言っても、彼は自分でいささか自分の眼を信じなかつた。それでも一步前へ出ようとはせず、結局自分の廟おみやの中に帰つて来た。

土穀祠おいなりさまの中は、いつそうまつ闇くらだった。彼は大門をしつかり締めて、手探りで自分の部屋に入り、横になつて考えた。こうして気を静めて自分の思想の出どころを考えてみると、白鉢巻、白兜の人は確かに著ついたが、決して自分を呼び出しには来なかつた。いろいろな品物は運び出されたが、自分の分け前はない。これは全く偽毛唐が悪いのだ。彼は乃公に謀叛を許さない。謀叛を許せば、今度乃公の分け前がないことはないじゃないか？ 阿Qは思えば思うほど、イライラして来て耐え切れず、おもうさま怨んで毒々しく罵つた。

「乃公には謀叛を許さないで、自分だけが謀叛するんだな。馬鹿、偽毛唐！ よし、てめえが謀叛する。謀叛すれば首が無いぞ。乃公はどうしても訴え出てやる。てめえが県内に引廻されて首の無くなるのを見てやるから覚えていろ。一家一族皆殺しだ。すぱり、すぱり」

第九章 大団円

趙家が掠奪に遭つてから、未荘の人は大抵みな小気味よく思いながら恐慌を来した。阿Qもまたいい気味だと思ひながら内々恐れていると、四日過ぎての真夜中に彼はたちまち城内につまみ出された。その時はしんの闇夜で、一隊の兵士と一隊の自衛団と一隊の警官と五人の探偵がこつそり未荘に到着して闇に乗じて土穀祠を囲み、門の真正面に機関銃を据えつけたが、阿Qは出て来なかつた。

しばらくの間、様子が皆目知れないので、彼等は焦らずにはいられなかつた。そこで二万銭の賞金を懸けて二人の自衛団が危険を冒してやつとこさと垣根を越えて、内外相応じて一斉に闖入し、阿Qを掴み出して廟の外の機関銃の左側に引据えた。その時彼はよ

うやくハツキリ眼が醒めた。

城内に著いた時には已に正午であつた。阿Qは自分で自分を見ると、壊れかかつたお役所の中に引廻され、五六遍曲ると一つの小屋があつて、彼はその中へ押し込められた。彼はちよつとよろけたばかりで、丸太を整理した門が彼の後ろを閉じた。その他の三方はキツタテの壁で、よく見ると室の隅にもう二人いた。

阿Qはずいぶんどぎまぎしたが、決して非常な苦悶ではなかつた。それは土穀祠おいなりさまの彼の部屋はこの部屋よりも決してまさは無かつたからだ。そこにいた二人は田舎者らしく、だんだん懇意になつて話してみると、一人は拳人老爺の先々代に滞つていた古い地租の追徴であつた。もう一人は何のこつたか好く解らなかつた。彼等は阿Qにわけを訊くと、阿Qは臆面なく答えた。「乃公は謀叛を起そうと思つたからだ」

阿Qは午後から丸太の門の外へ引きずり出され大広間に行った。正面の高いところにくりくり坊主の親爺が一人坐していた。阿Qはこの人は坊さんかもしれないと思つて、下の方を見ると、兵隊が整列して、両側に長い著物を著た人が十幾人も立っていた。その中にはイガ栗坊主の親爺もいるし、一尺ばかり髪を残して後ろの方に披さばいていた偽毛唐によく似た奴もあつた。彼等は皆同じような仏頂面で目を怒らして阿Qを見た。阿Qはこりやあ

きつとお歴々に違いないと思つたから、膝の関節が自然と弛んでべたりと地べたに膝をついた。

「立つて物を言え、膝を突くな」と長い著物の人は一斉に怒鳴つた。

阿Qは承知はしているが、どうしても立っていることが出来ない。我れ知らず身体が縮こまつてその勢いきおいに押されて揚句あげくの果ては膝を突いてしまう。

「奴隷根性！……」と長い著物を著た人はさげすんでいたようだが、その上立てとも言わなかつた。

「お前は本当にやつたんだろな。ひどい目に遭わぬうちに言つてしまえ。乃公はもうみんな知つているぞ。やつたならそれでいい。放してやる。」とくりくり坊主の親爺は、阿Qの顔を見詰めて物柔かにハッキリ言つた。

「やつたんだろ」と長い著物を著た人も大声で言つた。

「わたしはどうから……来ようと思つていたんです……」阿Qはわけも分らず一通り想い廻して、やつとこんな言葉をキレギレに言つた。

「そんならなぜ来なかつたの」と親爺はしんみりと訊いた。

「偽毛唐が許さなかつたんです」

「嘘^{うそ}を吐^つけ。この場になつてもう遅い。お前の仲間は今どこにいる」

「何でげす？」

「あの晩、趙家を襲つた仲間だ」

「あの人は、わたしを喚びに来ません。あの人は、自分で運び出しました」阿Qはその話が出ると憤^{ふん}々^{ふん}とした。

「持ち出してどこへ行つたんだ。話せば赦^{ゆる}してやるよ」親爺はまたしんみりとなった。

「わたしは知りません。……あの人はわたしを呼びに来ません」

そこで親爺は目遣^{めつか}いをした。阿Qはまた丸太格子の中に抛^{ほう}り込まれた。彼が二度目に同じ格子の中から引きずり出されたのは二日目の午前であつた。

大広間の模様は皆もとの通りで、上座には、やはりくりくり坊主の親爺が坐して、阿Qは相変らず膝を突いていた。

親爺はしんみりときいた。「お前はほかに何か言うことがあるか」

阿Qはちよつと考えてみたが、別に言う事もないので「ありません」と答えた。

そこで一人の長い著物を著た人は、一枚の紙と一本の筆を持って、阿Qの前^ゆに行き、彼の手の中に筆を挿し込もうとすると、阿Qは非常におつたまげて魂も身に添わぬくらいに

狼狽した。彼の手が筆と関係したのは今度が初めてで、どう持っていていいか全くわからない。するとその人は一箇所を指して花押の書き方を教えた。

「わたし、……わたしは……字を知りません」阿Qは筆をむんずと握んで愧かしそうに、恐る恐る言った。

「ではお前のやりいように丸でも一つ書くんだね」

阿Qは丸を書こうとしたが筆を持つ手が顫えた。そこでその人は彼のために紙を地上に敷いてやり、阿Qはうつぶしになって一生懸命に丸を書いた。彼は人に笑われちゃ大変だと思つて正確に丸を書こうとしたが、悪むべき筆は重く、ガタガタ顫えて、丸の合せ目まで漕ぎつけると、ピンと外へ脱れて瓜のような恰好になった。

阿Qは自分の不出来を愧かしく思っていると、その人は一向平気で紙と筆を持ち去り、大勢の人は阿Qを引いて、もとの丸太格子の中に抛り込んだ。

彼は丸太格子の中に入れても格別大して苦にもしなかつた。彼はそう思つた。人間の世の中は大抵もとから時に依ると、抓み込まれたり抓み出されたりすることもある。時に依ると紙の上に丸を書かなければならぬこともある。だが丸というものがあつて丸くないことは、彼の行いの一つの汚点だ。しかしそれもまもなく解つてしまった、孫子であれ

ばこそ丸い輪が本当に書けるんだ。そう思つて彼は睡りに就いた。

ところがその晩拳人老爺はなかなか睡れなかつた。彼は少尉殿と仲たがいをした。拳人老爺は賊品ぞうひんの追徴が何よりも肝腎だと言つた、少尉殿はまず第一に見せしめをすべしと言つた。少尉殿は近頃一向拳人老爺を眼中に置かなかつた。卓つくえを叩き腰掛を打つて彼は説いた。

「一人を槍玉に上げれば百人が注意する。ねえ君！ わたしが革命党を組織してからまだ二十日はつかにもならないのに、掠奪事件が十何件もあつてまるきり挙らない。わたしの顔がどこに立つ？ 罪人が挙つても君はまだ愚図々々している。これが旨く行かんゆと乃公の責任になるんだよ」

拳人老爺は大に窮おぼしたが、なお頑固に前説を固持して賊品の追徴をしなければ、彼は即刻民政の職務を辞任すると言つた。けれど少尉殿はびくともせず、「どうぞ御随意になさいます」と言つた。

そこで拳人老爺はその晩とうとうまんじりともしなかつたが、翌日は幸い辞職もしなかつた。

阿Qが三度目に丸太格子から掴み出された時には、すなわち拳人老爺が寝つかれない晩

の翌日の午前であった。彼が大広間に来ると上席にはいつもの通り、くりくり坊主の親爺が坐っていた。阿Qもまたいつもの通り膝を突いて下にいた。親爺はいとも懇ろねんじに尋ねた。「お前はまだほかに何か言うことがあるかね」

阿Qはちよつと考えたが別に言うこともないので、「ありません」と答えた。

長い著物を著た人と短い著物を著た人が大勢いて、たちまち彼に白金しろかたきん中の袖無しを著せた。上に字が書いてあった。阿Qははなはだ心苦しく思った。それは葬式の著物のようで、葬式の著物を著るのは縁喜えんきが好くないからだ。しかしそう思うまもなく彼は両手を縛られて、ずんずんお役所の外へ引きずり出された。

阿Qは屋根無しの車の上に昇かっぎあげられ、短い著物の人が幾人も彼と同座して一緒にいた。

この車は立ちどころに動き始めた。前には鉄砲をかついだ兵隊と自衛団が歩いていた。両側には大勢の見物人が口を開け放して見ていた。後ろはどうなっているか、阿Qには見えなかった。しかし突然感じたのは、こいつはいけねえ、首を斬られるんじやねえか。

彼はそう思うと心が顛倒てんととうして二つの眼が暗くなり、耳朶の中がガンとした。気絶をしたようでもあったが、しかし全く気を失ったわけではない。ある時は慌てたが、ある時

はまたかえつて落著おちついた。彼は考えているうちに、人間の世の中はもともとこんなもんで、時に依ると首を斬られなければならぬかもしれないこともあるかもしれない、と感じたらしかった。

彼はまた見覚えのある路を見た。そこで少々変に思った。なぜお仕置に行かないのか。彼は自分が引廻しになつて皆に見せしめられているのを知らなかつた。しかし知らしめたも同然だつた。彼はただ人間世界はもともと大抵こんなもんで、時に依ると引廻しになつて皆に見せしめなければならぬものであるかもしれない、と思つたかもしれない。

彼は覚醒した。これはまわり道してお仕置場にゆく路だ。これはきつとずばりと首を刎はねられるんだ。彼はガツカリしてあたりを見ると、まるで蟻のように人が附いて来た。そうして凶らずも人ごみの中に一人の呉媽を発見した。ずいぶんしばらくだつた。彼女は城内で仕事をしていたので。彼はたちまち非常な羞恥を感じて我れながら気が滅入つてしまつた。つまりあの芝居の歌を唱うたう勇氣がないのだ。彼の思想はさながら旋風のように、頭の中を一まわりした。「若寡婦わかごけの墓参り」も立派な歌ではない。「竜虎図」の「後悔するには及ばぬ」も余りつまらな過ぎた。やつぱり「手に鉄鞭てつべんを執つてキサマを打つぞ」なんだろう。そう思うと彼は手を挙げたくなつたが、考えてみるとその手は縛られていたのだ。そこで「手に鉄鞭を執り」さえも唱となえなかつた。

「二十年過ぎればこれもまた一つのものだ……」阿Qはゴタゴタの中で、今まで言ったことのないこの言葉を「師匠も無しに」半分ほどひり出した。

「好※^{ハオ}」と人ごみの中から狼の吠声のような声が出た。

車は停まらずに進んだ。阿Qは喝采の中に眼玉を動して呉媽を見ると、彼女は一向彼に眼を止めた様子もなくただ熱心に兵隊の背の上にある鉄砲を見ていた。

そこで、阿Qはもう一度喝采の人を見た。

この刹那、彼の思想はさながら旋風のように脳裏を一廻りした。四年前^{ぜん}に彼は一度山下で狼に出遇^{であ}った。狼は附かず離れず跟いて来て彼の肉を食^{くら}おうと思った。彼はその時全く生きている空^{そら}は無かつた。幸い一つの薪割を持っていたので、ようやく元気を引起し、未^まだまで持ちこたえて来た。これこそ永久に忘れぬ狼の眼だ。臆病でいながら鋭く、鬼火のようにキラめく二つの眼は、遠くの方から彼の皮肉を刺し通すようでもあつた。ところが彼は今まで見た事もない恐ろしい眼付を更に発見した。鈍くもあるが鋭くもあつた。すでに彼の話^{はなし}を咀嚼したのみならず、彼の皮肉以上の代物を噛みしめて、附かず離れずどこしえに彼の跡にくつついて来る。これ等の眼玉は一つに繋がって、もうどこかそこらで彼の靈魂に咬みついていようでもあつた。

「助けてくれ」

阿Qは口に出して言わないが、その時もう二つの眼が暗くなって、耳朶の中がガアンとして、全身が木端微塵に飛び散つたように覺えた。

当時の影響からいうと最も大影響を受けたのは、かえつて拳人老爺であつた。それは盜られた物を取返すことが出来ないで、家じゅうの者が泣き叫んだからだ。その次に影響を受けたのは趙家であつた。秀才は城内へ行つて訴え出ると、革命党の不良分子に辮子を剪られた上、二万文の懸賞金を損したので家じゅうで泣き叫んだ。その日から彼等の間にだんだん遺老氣質が発生した。

輿論の方面からいうと未莊では異議が無かつた。むろん阿Qが悪いと皆言つた。ぴしゃりと殺されたのは阿Qが悪い証拠だ。悪くなければ銃殺されるはずが無い！ しかし城内の輿論はかえつて好くなかつた。彼等の大多数は不満足であつた。銃殺するのは首を斬るより見ごたえがない。その上なぜあんなに意気地のない死刑犯人だつたらう。あんなに長い引廻しの中に歌の一つも唱わないで、せつかく跡に跟いて見たことが無駄骨になつた。

(一九二一年十二月)

青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932年（昭和7年）11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「彼奴↓あいつ 或↓ある 或は↓あるいは 些か・聊か↓いささか 一層↓いつそう
一旦↓いったん 愈々↓いよいよ 所謂↓いわゆる 於いて↓おいて 大方↓おおかた
却・反つて↓かえつて か知ら↓かしら 且つ↓かつ 曾て↓かつて 可成り↓かなり
屹度↓きつと 位↓くらい 此奴↓こいつ 極く↓ごく 極々↓ごくごく 此処↓ここ
此の↓この 此処↓ここ 之↓これ 偕て↓さて 宛ら↓さながら 併し↓しかし 而も
↓しかも 然らば↓しからば 従つて↓したがって 暫く↓しばらく 仕舞う↓しまう
随分↓ずいぶん 頗る↓すこぶる 即ち↓すなわち 折角↓せっかく 是非とも↓ぜびと
も 其↓その 大分↓だいぶ・だいぶん 沢山↓たくさん 丈け↓だけ 唯・只↓ただ

但し↓ただし 忽ち↓たちまち 例如ば↓たとえば 給え↓たまえ 為↓ため 丁度↓ち
ようど 一寸↓ちよつと 就いて↓ついて 詰り↓つまり て置↓てお て呉れ↓てくれ
て見↓てみ て貰↓てもら 何処↓どこ 兎に角↓とにかく 尚お・猶お↓なお 猶更
↓なおさら 中々↓なかなか 許り↓ばかり 筈↓はず 甚だ↓はなはだ 程↓ほど 殆
んど・幾んど↓ほとんど 正に↓まさに 況して↓まして 先ず↓まず 又・亦↓また
未だ↓まだ 儘↓まま 丸切り↓まるきり 丸で↓まるで 若し↓もし 勿論↓もちろん
尤も↓もつとも 矢張り↓やはり 已むを得ず↓やむをえず 漸く↓ようやく 余ツ程
↓よツほど 余程↓よほど 俺↓わし」

ただし、一部のカタカナ表記については、あらためていません。

※底本に混在している「灯」「燈」はそのままにしました。

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（山本貴之）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2004年8月22日作成

2018年7月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

阿Q正伝

魯迅

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 井上紅梅訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>